

旅に出る

2023. 7. 31

これからの時代を生き抜いていくには、何が必要か。その一つに、自分の頭で人とは違うことを考える能力が必要になるということがある。人とは違うことを考えるためには、多様なインプットが必要である。人間は、人から学ぶ、本から学ぶ、旅から学ぶことができる生き物である。

そう考えると、現在の教員の世界は、由々しき事態である。まず、人から学ぶことがむずかしくなっている。先輩から学びにくくなっている。お互いが忙しいのもあるが、先輩教師が、若手に教えることを躊躇している面がある。相手に合わせて教えるスキルが必要であり、教えることをためらうことがあるように感じる。

人から学ぶ、すなわち、教師文化の伝承である。小学校の先生で、見事な指導技術を身に付けている先生がいる。本を読んだり、人の授業を見たりしながら身に付けていったのかもしれないが、どうも師匠がいるように思えるときがある。ぜひ、どんな師匠に、どのように教えてもらったのか聞いてみたい。

次に、本から学ぶである。福島県で教育書を書店で購入しようと思うと、かなりつらい。ネットでの購入は簡単である。だが、タイトルと著者名と簡単な紹介を頼りに、期待しながら購入すると、失敗することがある。今の自分にマッチしないことがある。そこで、現物を見たくなる。仙台あるいは東京に行くしかない。そもそも教育書が売れないから売り場がどんどん縮小されていき、消滅していくのである。

我が書齋を見る。教育書をはじめ様々な本が所狭しと並んでいる。いや積み重なっている。果たして、これだけの書籍の情報量を消化しきれているのかということ、そんなことはない。最初から最後まで読破した本の方が少ない。数ページしか役に立っていないものもたくさんある。それでも、本が自分をつくり、自分を支えているのは事実である。

最後に、旅から学ぶである。この旅は、海外旅行のような、いわゆる旅行だけを言っているのではない。日常とは違った空間や場所に行くことである。教員は、学校に勤務して、子どもたちを相手に授業をするのが、通常スタイルである。だが、短期間ではあっても、大学で学んだり、企業で研修をしたり、青年海外協力隊として海外に行ったりと、教員でありながらも旅に出ることはできる。私の場合は、3年間にわたり海外に行くこととなった。まさしく旅である。

旅に出ると、ものの見方や考え方が変わる。新たな視点が生まれる。自分の判断基準が変わることもある。少なくとも、自分の頭で、人とは違うことを考えることには役立っている。教員に限らず、日本の若者たちには、ぜひ旅に出てほしい。若いうちがよい。働いていると、このままではだめだという閉塞感に襲われるときがあるかもしれない。そのときが、旅に出るタイミングである。私の場合は、そうだった。